

KTK ひゅうまん 京都

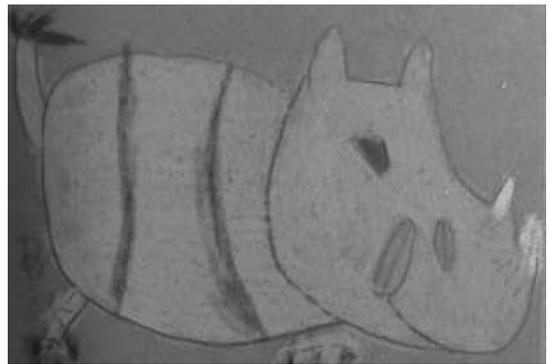
No. 556 2023年3月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話 090-1444-0046 購読料 1部80円 年間購読料1,000円（送料実費）

- P 1 左大文字 あそび
- P 2 常任委員会から 池添 素
- P 3 一人暮らし始めます！ 沖田 友子
- P 4 血の染みついたパトン 中村 暁
- P 5 電動車いす「まんまる号」ドライバー日記 山本耕平
- P 6 ジョニーの炸裂日記 ライスチョウジョナ
- P 7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P 8 2+2=詩 富士一文
- P 9 障害のある人の権利を守る北陣連から 山添 博史
- P 10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P 11 知っ得情報 松本 美津男
- P 12 障害のある人の家族の思い 沖田 友子

左大文字

▲岡山地裁は今年1月、2020年の岡山県知事選挙の際、下肢障害で障害者手帳4級の原告が郵便投票を利用できなかったのは、「法の下平等」を定めた憲法に違反していると国を訴えた事件に敗訴判決を下した。▲驚いたのはその理由にある。判決は郵便投票の対象は障害等級1、2級に限られているというものだった。判決では、原告の通院などのタクシー利用や自転車移動歴から、投票所まで行くことは著しく困難であったとは認められないとしている。自転車で交通事故を繰り返したことや、生活保護受給者でタクシー利用が厳しいことは考慮されていない。また、判決は「類型的に」肢体不自由1、2級の者は投票所に行くことが不可能又は著しく困難だが、「類型的に」4級の者はそうではないとしている。しかし、その根拠は明確には示されていない。▲障害認定の問題点について、国連の障害者権利委員会は昨秋日本政府に対して、医学的な障害（＝機能障害）の判定とその人が置かれている環境からもたらされる障害にはズレがあり、全ての障害者に投票の手続きや設備を適切かつ利用しやすくするために、公選法を改正するよう勧告している。▲障害をその人が置かれた環境とは無関係にとらえる、わが国の障害認定制度の根本的な問題を衝く指摘である。障害程度の判定結果が、すべての生活行動の可否を決めるとは、常識から考えてもあり得ない判決といえよう。（あそぶ）



「春の香り」
渡辺あふる

常任委員会から

〈春が来た〉

3月に入りいつきに暖かくな

り、花たちが咲き始めました。椿、

桃、梅と華やか。この間まであんなに寒かったのに、季節は忘れな

いで巡ってくる。12年前の東日本

大震災の時にも被害の大きさに気

持ちが沈んでいる中でも春は花を

咲かせ、季節を感じさせてくれた。

しかし、原発の被害は満開の花を

頂いた山に足を踏み入れることを

許さなかった。見えない、匂わな

い、人が感じるができない放

射能の恐ろしさと、何の罪もない

花たちから人を遠ざける怖さから

感じる事ができた。3・11は

一度事故が起きたら取り返しがつ

かないことになる原発の恐ろしさ

を再確認し、世界中から原発を無

くす社会をつくるための決意をす

る日ではと毎年思う。匂わない、

見えない放射能だからこそ、香し

く匂い、色鮮やかな花たちを通

して考える。

〈マスクなし〉

目視できないところではコロ

ナのウイルスも同じかも。見え

ない敵から守ってくれたと思わ

れるのがマスク。「しておかない

と睨まれる」「かけていたら安

心」「決められているから」など

で3年間は毎日マスクのお世話

になってきた。世界中ではもう

マスクをしているのは日本ぐら

いらしいが、国民性からだろう

か、ほぼみんな国の指示に従っ

てきた3年間。3月13日からマ

スクはつけるも外すも「個人の

判断で」となった。指示に従っ

てきたのに今度は自分で考える

と、私は多くの人がマスクを手

放せないのではないかと考えて

いる。「顔パンツ」というぐらい

裸になるぐらい恥ずかしい行為

である。パンツ、イヤ、マスク

しない姿に誰がなれるだろう

か。マスク忘れたときに受けた

刺さるような視線が同じように

今度はマスクしている人が怪訝

な視線を受けるのだろうか。マ

スク問題より、もしも今後感染

したときの対応がきちんと自己

責任で済まされることなく救わ

れることの方が大切だ。子ども

たちのマスクはもういいだろ

う。その為には学校の先生から

率先してみんなマスクを外そ

う。そうすれば子どもたちも安

心して外せる。笑顔の表情は大

切。子どものハッピーをマスク

なしの笑顔でプレゼントできる

ように願いたい。

〈一斉地方選挙〉

3月31日告示4月9日投票

という日程で京都府会議員と京

都市会議員を選ぶ選挙です。生

活に一番密着している政治家を

選ぶチャンスです。とりわけ京

都の街がボロボロに壊されて、

ホテルと空き地だらけになって

いる。この空き地には何が建つ

んだらうか、ホテルかコンビニ

か、京都らしさはもう跡形もな

い。お寺や神社の中に入れば、

少しは歴史を感じられるかもし

れない。賀茂川の河原に立てば

比叡山が見えるかもしれない。

北の方へ行けば山からの京都が

味わえるかもしれない。それで

も高級ホテルも山も中であつ

て、すべてが完結する仕組み、

それなら京都に來なくてもよい

のでは。いずれにしろ、もう手

遅れかもしれない京都壊しは少

しでも早くストップしなければ

ば、観光客が来ないどころか若

者も子どもも京都から出てい

く勢いは増すだろう。

皆さんの一票が京都壊しにス

トップする力になります。だれ

に投票するか大切な選択です。

一人暮らしを始めます！

沖田 友子（京障連代表委員）

重度の知的障害があり言葉で伝えることができない息子の一人暮らしが始まり二月経とうとしています。バリアフリーの賃貸住宅だということを前号でお伝えしました。リビングの続きにトイレ、お風呂があります、

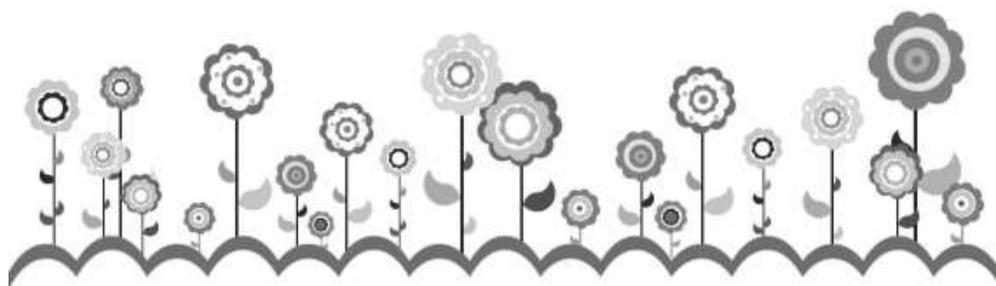
歩行支援用具としてそれぞれに手すりを付けてもらいました。各部屋は住居人の介護度に応じてその人に見合った手すりなどをつけることができるようになっていました。

昨年秋に、引越し先が決まったことから、まず考えなければならなかったことは、日中は生活介護に通う前提で、朝、夕、夜間を支えてもらえるヘルパーさんを派遣できる事業所が見つかるかが最大の課題でした。夜

間、泊まりのできるヘルパー事業所探しはかなり困難を要することだろうと考えていました。まずは今、お世話になっている事業所にグループホームを退所してからも支援が可能かどうか、住む行政区が変わっても派遣可能かお尋ねするところから始めました。自宅からは車で20分程度かかる場所でした。そして同時に夜間宿泊が可能かどうかもお尋ね、お願いしていきま

できない位、喜びました。私たち親子にとって、家族にとつて大きな力、後押ししてくれる力となりました。

心配していた夜間の宿泊については、グループホームの宿泊日数が減った時、お世話になった事業所が複数回、宿泊可能と返事をもたらっていました。最初から一週間通してヘルパーさんに泊まってもらうことは難しいかもしれないという気持ちもありました。一日でも多く泊まってもらうことができるよう、新しい事業所探しを開始しました。いくつかお尋ねする中で話を聞いてくださる事業所と巡り合うことができました。障害のある子どもを育てておられる親が立ち上げられた事業所でした。面談からトントンと週間予定表の決まっていなかったヘルパーさんの派遣事業所が埋まってきました。ご縁を感じる、感謝する日々が続いています。



血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

② 「個人」

医療制度をめぐる動きがあれこれ持ち上がっている。国会にはマイナンバーカード普及のために保険証を廃止する法案、少子化対策として公的医療保険からの出産一時金を42万円から50万円に引き上げるために後期高齢者医療の被保険者（75歳以上の人たち）の負担を増やす法案、現役世代の保険料負担を軽減するためと言って、これまた75歳以上の人の負担を増やす法案（ちなみに国の負担も軽減）等が提出され、やりたい放題である。全世代型社会保障改革というのはとどのつまり高齢者を虐めて財源を浮かそうという人でなしの政策である。もちろん為政者の人でない

しぶりは今に始まったことではない。だがこんな医療改革ラッシュを許せば、私たちみんなが人でなしになってしまう。人ではないものだ。

さて、この原稿を書いているのは3月13日（メ切を過ぎている）。わざわざ日付を記すのは記録のためである。今日からマスク着用が「緩和」された。厚生労働省のホームページには「マスクの着用は、個人の主体的な選択を尊重し、個人の判断が基本となりました。本人の意思に反してマスクの着用を強いることがないよう、ご配慮をお願いします」（厚生労働省ホームページ）と書いてある。



「お願い」は結果的に「強制力」を伴うものだと考えているにすぎない。だから今回のマスク着用「緩和」も、ちよつと自分

たちがスタンスを変えたら下々の者もそれに倣って変更するに決まっている。「国民」なんかその程度のもんだ、と見下しているのだろう。ホームページのわずか74文字の文章にそれが滲み出ている。だが正直なところ、初めのころ「自粛自警団」だの「マスク警察」だのと市民による市民監視が広がったのを思い出すと、やっぱり私たちはその程度の者なのかもしれない。なという気になってしまふ。

私たちはマスク着用を「個人」として主体的に選択・判断できるほどに、本当に「個人」として生きていくのだろうか。

5月8日にコロナは感染症法の5類へ移行される。その後、私は自分自身の判断に基づいて生きていくことが出来る程度の「個人」でいられるのだろうか。

電動車いす「まんまる号」

ドライバードライバー日記 ⑪

山本耕平

大学院生二人が創カフエを訪れた日、先輩車いすドライバールの彼女は、京都市の南部にある自宅から地下鉄で京都駅へ、京都駅からはるかで阪和線熊取へ、熊取から和歌山バスの熊取―粉河便を利用して創を訪れました。この和歌山バスの熊取―粉河便は、犬鳴峠を越え走る便です。犬鳴峠には、大阪屈指の心霊スポットである「犬鳴山トンネル」があります。このトンネルには、恐ろしい心霊現象の噂が絶えません。この峠の頂上あたりで県境があり、府道から県道にバトンタッチされるところにその犬鳴山トンネルがあります。

彼女が、その犬鳴峠を越える和歌山バスを活用した理由は、

調べ、関係部局と交渉する力は、

学びたいところです。人生の途中で車いす生活になった私は、どうも他者（なかでも妻）への依存が強いようです。院生たちと共にランチをとった妻は、その後、意欲的な行動を、自立することを強いるのです。これは、まさに藪蛇だったのでしょうか。いや、いい刺激でした。

まず、私にとって必要なのは挑戦です。車いす1年未満の初心ドライバ―は、京都駅から大学へは、6系統のみを活用し、他の系統を使うことへの不安がありました。しかし、彼女の意欲的な挑戦をみるなかで、今日は206系統を始めて活用しました。ほんのちよっぴりの変化を求めての挑戦です。ただ、少しだけ見える景色が違い感動を覚えました。

―粉河駅から和歌山駅に向かう便は、同行の男子院生と創のスタッフが介助したとして、帰りの粉河駅から和歌山駅に向かう便は、エレベーターがなく、階段を使い下りホームにいかなければなりません。これは、とうてい無理なことです。

私の病気は、多発性硬化症の二次進行型と言われるものです。これは、最初は再発寛解型で始まりませんが、途中からゆっくりとした症状の増悪が止まらなくなり、一時的に進行が停止することもありませんが、回復し症状が軽くなることはなくあります。そのなかで、どうしても必要となるのが、この病気を受容するとともに、自身のできることをできる限り自身の力で行ない快適に過ごしたいです。創カフエに、彼女たちを訪れた日、彼女の姿を見、私

その条件を前調べした彼女が、この病気を受容するとともに、自身のできることをできる限り自身の力で行ない快適に過ごしたいです。創カフエに、彼女たちを訪れた日、彼女の姿を見、私



ジョニーの炸裂日記15

ライスチヨウジヨナ（イラストレーター）

数年ぶりにミラーボールの光を浴びた。

コロナ禍以前は好きなバンドのライブに行ったり、はたまた自分でクラブハウスにてイベントを主催したりしていたが、

コロナ禍に入り当然のことながらそれらは軒並み中止に追いやられた。昨年あたりから世の中のイベント事は再開されつつあったが、世の中が活動しだせば感染者数も増えるわけであり、つまり皆が楽しくやればやるほど私は余計そんな中に飛び込むわけにはいかなくなるのである。

私が趣味を謳歌するのは夢のまた夢の話であった。

人の少ない場所へ散歩に出かけたりすることはあった。確かに気分転換になるし、リフレッシュすることはできたが、その

リフレッシュ気分もあくまでも一時的なものであり、あまり持続性が無い。自粛生活がまたすぐ始まるとあつという間にストレスがリバウンドしてしまう。普通に出してリフレッシュするのは、気分展開の度合いも大きく違うし、自己実現の観点から見ても大きく意味合いが違うだろう。感染した

ら重症化率が高いので感染者数が多い時は我慢しましょう、と言われるのは納得するし実際にそうしてきたが、もはやこれがあと何年続くのかもわからない状況となると、社会活動を既に再開している人にそれを言われる筋合いは無いと言いたくなってしまう。

そんな中、一番好きなバンド

がなんと解散するというニュースが今年の1月に入り、ショックもショック、大ショック。2月に解散ライブがあるということで、これは行かないと気が済まないし、行かないと一生後悔するに違いないと思った。しかしそれを知った1月はまだ第8波のピーク

時で、とてもじゃないがこの状況で行くのは無謀ということは頭では理解していた。それでも、たったの1ヶ月で波が落ち着くという無理のある奇跡を期待し、かなり強引に予定を立てて一ヶ月後、本当に奇跡が到来したかのように感染者数が下がり

（全数把握ではないので油断は禁物だが）、無事解散ライブに参加することができたのである。とは言え、当日のヘルパーには自身の家族もあるのに、あんな密としか言いようがない場所へ付いてきてくれたことには申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

天井には数年ぶりのミラーボール。突き刺すように長く伸びた光の輝きは、徐々に元の生活に戻れるのではないかという淡い期待を感じさせた。正直、ライブ自体よりもあのミラーボールの光景のほうが記憶に鮮明に残ってしまった、そんな一日であった。



あった。

つれづれあらぐせ

あらぐせ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

場面⑧ 療育手帳の再判定、

次の10年後に思いを巡らす

20代で療育手帳の新規交付を受けた彼。10年が経ち、再判定の時期になりました。「療育手帳は、児童相談所又は知的障害者更生相談所において、知的障害があると判定された方に交付される手帳です。療育手帳をお持ちの方は、障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスや、各自治体や民間事業者が提供するサービスを受けることが出来ます。」というのが、厚生労働省のホームページにある説明です。

何かあるたびに「障害のこと聞いてなかった」「そういう環境で育ってきてない」を繰り返す彼は、再判定に相当なプレッシャーを感

じていました。お知らせが届いた時から当日までの3ヶ月以上、「療育手帳があってもなくても一緒やで」「手帳ってうるの?」「なくても生きていける」の訴えが続きました。他の支援機関にも、「行かなあかんのですか」「行きたくない」「更新しなかつたらどうなりますか」と相談をしていました。

必要な支援を受けるための手続きだと説明を受け、「ご本人もいったんは了承。初めての再判定でご本人の不安や緊張が大きく、また生活の様子を伝える必要があるので、当日は一緒に行くことになりました。」

はいうもの、「ご本人自ら予約をキャンセルしたり当日の朝に同行者を変えたいと連絡が入ったり、最後まで紆余曲折がありました。」

行かないといけないのは分かっています。行きたくない彼。最終的には、彼が一番付き合ひが長い支援者からの言葉が支えでした。「ちゃんと支援を受けた方がいい」「検査の1時間で全てが分かるわけでは

ない」「しまへんやう」と思わないでありのままの「ご本人」、自分に言い聞かせるように繰り返す「ご本人」でした。

当日、検査でわからない時はわからないと言っていることを伝えて、それぞれ別の部屋へ。彼は「じゃあ」と大きく手を振って、検査室へ向かいました。1時間後、検査を終えた彼は玄関の外で待っていました。無事に済んだことを、就労先に電話で伝えていたそうです。

帰り道、どんな検査があったかを話しながら「猛勉強したら全部解けると思う」と一言。そういうものではないと説明があったのですが、出来る／出来ないの評価はやはり気になるようです。「今日は来れてよかった、検査おつかれ様」と労いつつ、次の再判定が脳裏をよぎりました。

中山 恵美子（あらぐせ福祉会）

2+2=詩

「雪の日」

冬の朝、誰もいない道を歩いていく
真っ白な雪の上に黒い足跡をつけながら
さくさく。さくさく

ふと振り返ると黒の点描の一本線ができていて、
そこにまた深々と雪が降り積もっていく

冬の夕方、誰かがいた道を歩いている

溶けて汚れた雪をおっかなびつくり踏みながら
ぐちゃぐちゃ。ぐちゃぐちゃ

ふり振り返れば入り乱れるどろどろの足跡
そこに降る雪は積もることなく溶けるばかり

雪が降って積もって消えて

雪が降って積もらず消えて

そうしていつしか春が来る

雪が降らない春が来る



「眠れぬ夜」

布団に入っただいぶ経つ

目を閉じては開けるを繰り返す

ごろりごろりと寝返りをうつ。右に左に繰り返す

時計がチクチク鳴っている。時計が一時だと言っている

眠れない、眠れないとつぶやく声が、

部屋の闇の中を漂っている

布団に入っただいぶ経つ

ぎゅっと目を閉じてみて、眠気が来るのを待っている

姿勢をあれこれ変えてみる。布団にこすれて音がした

時計がチクチク鳴っている。時計は二時だと言っている

寝たい、寝たいと思っっているのに、

体は言うことを聞いてくれない

布団に入っただいぶ経つ

諦めて本を読んでいる

目は滑って思考はぼんやり。何も頭に入っっていない

時計がチクチク鳴っている。時計は三時だと言っている

僕一人だけの夜の世界

それはまだまだ終わらない

ああ

こんなにこんなに朝が遠い



作・富士一文 挿絵・水口萌恵

**障害のある人の
権利を守る 北障連から**

「いつの時代も地域とともに」
京丹後市にどんな障害のある人も暮らすことができるグループホームをつくる会

事務局長 山添 博史
(あみの福祉会常務理事)

**3 仲間を主役に
グループホームづくり運動へ**

医療的ケアを必要とする人をはじめ、障害の重い人達の居場所として、あみの福祉会チユリッパハウスが2002年4月に立ち上がった以降、京丹後市一円から仲間のみなさんが通い始めました。しかし、家族も高齢化する中、家族に何かあった時の受け入れ先は、亀岡の花ノ木医療センターか遠方の施設や病院でした。当事者団体や関係団体の運動もあり、数年前に医療型シヨートの制度ができたことで、遠方に行かなくても病院から事業所に通うことが可能となりました。現在2名の方が何年もの間利用されています。しかし、コロナ禍で通所が困難となり、病

院の天井を24時間見つめての生活を余儀なくされました。

そして、改めて病院は暮らしの場ではないということが、関係者の中でも語られました。どんなに障害が重くても、この地域で暮らし続けられるグループホームがほしいとの当事者や家族のあたり前で切実な願いから、あみの福祉会が運営主体となり、総事業費約1億5千万円をかけたグループホーム建設を決められました。しかし、多額の自己資金が必要であったことから、2021年9月10日、「京丹後市にどんな障害のある人も暮らすことができるグループホームをつくる会」を立ち上げ、6600万円の自己資金作りに取り組みむことになりました。

設立総会では、仲間を代表して、トーキングイベントという声ができる機械を使って、以下のことを訴えられました。

「ワタシワ、シヨウライテキニハ、ホームニハイッテユツクリスルノガユメデスガ、ワタシタチシヨウガイガオモイナカマガハイレテ、カシゴシサンガイルホームガキョウウタンゴニアリマセン。ゼヒ、カンゴシサンガイルホームヲツクツテクダサイ。オネガイシマス」と発言され、参加者の心を動かしまし

た。

物価高騰が続き、市民の多くの方々が暮らしにくさを抱える中にある、取り組みを進めるのは容易なことではありませんでしたが、以下のことを大切に進めました。

- (1) 仲間や家族等当事者が我が事として取り組もう。
 - (2) 京丹後市の新たな社会資源をつくるという視点で、京丹後市民に広く訴えよう。
 - (3) いつの時代も地域と共に歩めることを実証しよう。
- という3点を大切に取り組んでいます。

そして、つくる会(略称)では、左記の取り組みを進めています。

- (1) つくる会員を増やすこと。(個人3,000円、団体5,000円)(目標2,000口(現状は600口))
- (2) 市内一円に募金箱を設置する。(300個目標で200個設置)
- (3) 毎月の一斉行動(仲間、会員、家族、職員、つくる会役員等)で会員や寄付、募金箱設置を地域の個人や企業に訴える。
- (4) クラウドファンディング(2022.6.27〜2022.8.1

- (2) の取り組みを行いました。
- (5) 映画(星に語りて)や桃山の里ふれあいフェスタ等のイベントへ、つくる会として共催しました。
- (6) ミニバザーを開催しています。

現在、目標の6,600万円に対して、4,365万円(66%)の到達となりました。残り9か月でやりきらなければなりません。

(次回は最終原稿「いつの時代も地域とともに」)



新聞折込に入れたチラシ

365歩のマーチ



36 きびだんご

先日、保育園の土曜参観があり両親で参加しました。コロナ禍でしばらく行われていなかったのですが、一人は子どものそばで、

「一人で」にやにやとしながらと年がら年中同じ答えが返ってきます。たくさんの友達のなかでゆいちくんがどんな姿で過ごしているのかは想像ができませんでした。

一人は窓際から少し離れて…という密にならないような配慮の

親子3人で登園し、保育室に入ると先生が迎えに来てくれます。

なかで再開されました。保育園に預けるのは7時半の朝一番、お迎えに行くのも19時前の最後。ゆいちくんと先生と一緒にいることが多く、友達がいても数人。保育園の連絡帳には「きょうは〇〇くんと一緒に追いかけてっこをして遊んでいましたよ」などていねいに伝えてくれているのですが、ゆいちくんに聞いても「今日何して遊んだん？」、「ブロック」、「誰と一緒にブロックしたん？」

友達と関わり合ったり先生と遊んだりする子どもたちがいるなか、ゆいちくんは先生のひざに座ってカチンコチン。おはようの集まりが始まっても先生のひざから私たちの方をチラチラと見てははにかみ笑顔。いつもとはちがう雰囲気、親の視線を感じて緊張していました。

その日の遊びは桃太郎を題材に、子ども達が先生扮するオニを退治していくというもの。子ども達が一度保育室から退出し、自分たちでつくったかぶり物をかぶって再度入室、親を驚かすところから設定保育が始まります。ゆいちくんも自分のつくったかぶりものをかぶって、「わー！」と、誰を驚かすわけでもないのですが、よくやうき雰囲気になじんでほぐれてきたようです。再入場後はみんな着席して、オニ退治のために先生が一人ひとりにきびだんごを配っていきます。きびだんごを配られた子どもたちはぱくぱくと食べるフリ。みんなオニ退治への期待を膨らませます。いよいよゆいちくんの席に先生が到着してきびだんごを渡そうとすると、くるりとうしろを向いて首を振っています。：いやな予感。それまで順調にきびだんごを配っていた先生も「ん？」と流れが止まりかけます。少し待ってもきびだんごを受け取りそうもないゆいちくんを見て先生は機転を利かせて「きびだんごを食べなくても倒せるかな？」と

聞くと「うん」とうなずいていました。：息子よ。たしかに、正月の雑煮のおもちやお菓子に出てくるまんじゅうや団子はいっさい食べない。こんなところで食の好き嫌いを発揮しないでくれ。。きびだんごを食べて家来になるのは一種の儀式なのだよ。。と思いつつも、報酬によらずともオニをやっつける息子をひそかに応援していたのでした。

安藤 史郎（あかきぎびの園）



知つ得情報

郵便により不在者投票

代表委員 松本 美津男

4月は一斉地方選挙。地方は国政の行方も決める重要な選挙です。投票所に行きにくい人が在宅で投票できる、郵便による不在者投票制度を簡単に紹介します。

〈対象者〉

(1) 身体障害者手帳所持者で、両下肢、体幹、移動機能の障害の程度が1級又は2級の人、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう、直腸、小腸の障害の程度が1級又は3級の人、免疫、肝臓の障害の程度が1級から3級までの人。

(2) 戦傷病者手帳所持者で、両下肢、体幹の障害の程度が特別項症から第2項症の人、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう、直腸、小腸、肝臓の障害の程度が特別項症から第3項症の人。

(3) 介護保険の被保険者証の要介護状態区分が「要介護5」の人
※身体障害者手帳の上肢又は視覚障害1級の人、戦傷病者手帳の上肢又は視覚障害が特別項症から第2項症までの人は代理記載制度が利用できません。

〈申請先〉

選挙人名簿登録地の市区町村の選挙管理委員会。



あなたもぜひ
仲間に

サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に
京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、
無差別平等の医療と
福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を
目指す方をご紹介します

 京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階
TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017
Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>
e-mail: info@kyoto-min-iren.org

ありがとうございます

会費 久保村利恵子 (敬称略 2023.3.10)

障害のある人の家族の思い

京都市内に住む19歳から30歳代の障害のある子の親の集まり「気楽にお話ししましょう会」を2022年7月と10月に開催しました。2回とも十数名集まり、貴重な意見がでましたのでご紹介します。

学校を卒業すると日頃やり取りしていた親も家族のことや仕事、そしてコロナ禍で家庭のことを話す場がほとんどなくなっていました。

「子どものことをしていたらあっという間に一日が過ぎる。先のことを考えることはあるが、学校もずっと送迎付き添っていた。」「離れる時間は貴重だと思う。学校時代は修学旅行など離れる期間があるが、卒業後はないので、宿泊を含むような行事があれば利用したい。」「働いているので親同士とのつながりを作ることができずにきた。不安しかない。」このように学校時代はいろいろありながらも学校というつながりがあり、一緒に考えてもらえる存在が明確にあったと思います。それが卒業を境に親を取り巻く環境が厳しいものになってしまうということをイメージして暮らしている親はきっと少ないのが実際のところではないでしょうか。

「今はヘルパーさんがいないと考えられない生活である。先のこと心配。」「配偶者が亡くなり、毎日ヘルパーさんに助けてもらっている。心配していることは、あと10年したらどうなっているのだろう、施設に入所となるのだろうか。」「今は入所を考えられないけれど、自分が年齢を重ねたときのことを考えるとどうしたらよいだろう。」「両親が歳を重ねて、先のこと心配。これから先、どうしたらよいかリアルに考えている。」「家族だけでは、どうしようもないと思う。生活の場を広げたい。」「きょうだいもいるが、どこまでどうしてやったらよいのか。どう育てていけばよいのか。親が衰えたとき、どうしたらよいのか一緒に考えていきたい。」

これらの将来の暮らしの不安や悩みの解消についての解決策皆が共通に思っているところです。このようなすぐに解決できないかもしれない課題について、まずは出会うこと、口にすることが第一歩だと思います。

次回はより具体的な悩みについてご紹介します。

呼びかけ人: 沖田友子